



遠江・山と里の民俗

会報 第010号

3月4日 午前10時から宮座の人たちの取り仕切りでが田遊祭始まった。地元の人を中心に100人以上の人が集まった

五穀豊穰を祈願する田遊祭

たうたさい

息神社の田遊祭は、現在、新暦の三月の初午（はつうま）の日に実施していますが、宝暦七年（一七五七）から明治四年（一八七二）までは旧暦の二月の初午の日に行われていました。今年は三月四日十時より行われました

神社拜殿の中央に「田所（たどころ）」（約二メートル四方の模擬田）が設定され、そこを中心に実施されます。この田遊祭は、五穀豊穰を祈願する神事として宮座によって行なわれてきました。

元来、舞を伴っていたもので、明治元年の神仏分離令により鎌倉時代の作といわれる「神楽歌（かぐらうた）」の中の仏の部分が削除され、舞は廃絶するに至りました。明治四十年ごろになり、神楽歌は元通りになりましたが、舞は復活しませんでした。

田遊祭の運営には、神社の氏子の内、宮座を組織している六つの名字の家、すなわち中村・吉田・内田・藤田・山内・山下の「六名（ろくみやう）」がこれにあたっています。

現在の宮座に加入している家は、約一六八戸です。毎年の担当は領家・浅羽・西ヶ崎・中村・小山の順に輪番で担当しています。田主・代官・稚児（小学生の女子）の選出は、その年の当番の字から選出され、歌い手については当番の字にかかわらず選ばれています。



粉を受け取る宮座の人たち

田の前に宮座の方が小さな籠の前に座り、神職から粉をもらい歌詠みにあわせて六名の代表が順次粉を撒いていきます。

●鎌倉時代から田遊びが盛んだった遠江

田遊びが成立したのは鎌倉時代（あるいは平安末期）と推定域一帯には、早くから田遊びや神楽といった祭祀芸能が根付いていたようです。息神社には南北朝から室町時代より伝わる秘蔵の古面（県指定文化財）があります。田遊祭には使われず雨乞いに使われたと伝わっています。田遊祭には祭祀面七面が田所に掲げられます。

宮座を中心に氏子会、自治会も一緒に、この春の行事に参加しています。

※宮座 氏子の一部によって組織され、氏神の神事を行う祭祀集団。近畿地方を主として、西日本に多く近くは湖西の女河浦神社にもある。室町時代頃から顕著になったという。

※田遊祭は、

「たうたさい」「たあそびまつり」「たうたまつり」などの呼び方がある。



涅槃会(ねはんえ)

涅槃会とは

旧暦の二月十五日はお釈迦様が亡くなられた日です。その日には寺々ではお釈迦様が沙羅双樹の間に身を横たえ、たくさんのお弟子や国王、大臣、神々、動物や小さな虫に至る生きとし生ける者全てが嘆き悲しんでいる場面を描いた涅槃図を掲げ、絵解きをしました。この地域ではほとんど新暦の二月十五日に行われているので、実際の季節感とは少しかけ離れているようです。

涅槃図語り

では、涅槃図を前にした絵解きの様子を次に紹介しましょう、『八十歳になられたお釈迦様はその当時インドの中でも大きな国だったマガダ国の都、王舎城



山口県の竹林史博師の解説 天竜区熊 光雲寺



北区引佐町金指実相寺の涅槃会

時は二月十五日満月の夜でございました。突然大地は鳴動し、四本の沙羅双樹はたちまち白い花を付けて悲しみました。そして、菩薩、天部を初めとして人間はもとより動物や虫に至るまで五十二種類の生き物が集まって嘆き悲しんだのでございます』

浜松の涅槃会

かつては村々の仏教寺院で本堂に涅槃図を掲げ、涅槃会を催していました。蠟燭の炎に揺らめく色鮮やかな涅槃図を眺めながら語りに聞き入るのが風物詩になっていました。最近はその様子を耳にすることが少なくなりました。でも、今もあちこちの寺院で行われていました。

引佐町の金指の実相寺では浜松地域認定遺産に指定された涅槃図を前に二月十五日の夜行われました。

「阿南よ、私は疲れた横になりたい。沙羅双樹の前に頭を北に向けて床を用意してくれ」こうしてお釈迦様は休まれました。弟子たちに「諸行は無常である。怠ることなく努めよ」と告げられました。

江戸時代中期に京都の絵師によって描かれたという大幅の涅槃



涅槃団子

図を前に、涅槃会が開かれました。ゆらめく蠟燭の炎に照らされて浮かび上がる美しい絵を前に女性達の詠う御詠歌の聲が夜のしじまに流れて涅槃会は始まりました。

かつて鎌倉円覚寺の管長であった朝比奈宗源師は「わしは子どものとき、お寺の涅槃会にお参りして、涅槃団子を食べながら、ふと涅槃図をみた。なんとお釈迦様の回りに、たくさんの人が泣いている。動物までも泣いている。わしも死ぬときには鳥にも泣かれるような人間になりたいたと子どもながらに思った。

それがわしの出家の縁になった」と述懐されたように強烈な印象を人々に与えた集まりでした。

最後に、五色に色づけされ



浜北区庚申寺の涅槃図



北区引佐町本龍寺の涅槃図

た涅槃団子が出され、夜遅くまで語り合いが続きました。

■各地のおくないの次第には共通点も多くあります■(現在の演目)

不動様の水汲み	面清め	阿弥陀様の祭り	三々九度の盃	伽藍様の祭り	泰蔵院内の祭り	神の舞	三つ舞	槍の舞・もどき	片剣の舞・もどき	両剣の舞・もどき	翁	松かげ	宵の獅子	鬼の舞	仏の舞	年男	女郎の舞	稲むら	駒の舞	猿追	綿買	塩買	田植え	汁かけ飯	悪魔払い	夜明けの獅子	舞おさめ
---------	-----	---------	--------	--------	---------	-----	-----	---------	----------	----------	---	-----	------	-----	-----	----	------	-----	-----	----	----	----	-----	------	------	--------	------

懐山のおくない
次第

寺野のひよんどり
次第

川名のひよんどり
次第

神沢おくない
次第

黒澤田楽
次第

息神社田遊祭

伽藍祭り	本堂祭り	ひよんどり	順の舞	巫女の舞	万歳楽	三つ舞	片剣の舞・もどき	両剣の舞・もどき	ひのう	予の舞	粟穂の舞	杵の舞	女郎の舞	翁	松かげ	獅子の舞	鬼の舞	ねこざね	シシウチ	的打ち	水垢離	タイトボシとヒドリ	堂内祭事	ウタヨミ	禰宜の舞	順の舞(正)	おんばの舞	順の舞(大)	はらみの舞	片剣の舞	片稲藁の舞	両剣の舞	両稲藁の舞	獅子の舞	伽藍鎮め	汁かけ飯	田遊び
------	------	-------	-----	------	-----	-----	----------	----------	-----	-----	------	-----	------	---	-----	------	-----	------	------	-----	-----	-----------	------	------	------	--------	-------	--------	-------	------	-------	------	-------	------	------	------	-----

注目点
三日堂から八日堂までのそれぞれのおくないをの次第を見ると片剣や両剣の舞、獅子はすべての次第にある。また神の舞、年男、綿買、塩買などは懐山独自の次第と思われる。興味深く山間部の生活の様子が伺える。
それぞれの次第で各共通点が見えて芸能文化の伝わり方を示している。



懐山のおくないには綿買の演目がある

小神祭り	鎮守社内	鎮守の舞	垂彌陀の舞	はやしもの・とこ	つる・源蔵改	つるぎの舞・もどき	矛(火の王舞)	杵の舞	獅子の舞	駒の舞	みのくち・おくな	松かげ・三番叟	くなつくり	きぬきせ	いみぞさらえ	田うち・しばかり	しばしき・いもゆゑ	もみまき	鳥追	麦刈り	桑取り	妻つき・米つき	ひる	あらう	田うゑ	ひるめし	あわとり・あずき	まめ・いもとり	としのみ	いなほら	げとうばらい
------	------	------	-------	----------	--------	-----------	---------	-----	------	-----	----------	---------	-------	------	--------	----------	-----------	------	----	-----	-----	---------	----	-----	-----	------	----------	---------	------	------	--------

田遊祭りの演目は芸能はなく歌詠みで田の農作業を表している。
昔は芸能の狂言や舞があったことは残されている面度うかがえる。獅子頭が二面あることは獅子の舞もあつたのではないかと想像する。
■の色は田楽を伝える演目で遠江の各地に残されている。神澤おくないの詞章本では、昔の演目に水口開け、畦塗り、田打ち、苗草取、粃まき、鳥追い、田植え等の演目があつたと記されている。
昔から米に対する人々の願いは春のこれらの行事が豊作を願う田遊びや田楽で伝えられていったのではないか。取れたお米が豊作になって、万歳楽、万歳楽と、お祝いを皆で唱えられるように演目に入っているのではないか。
「東久留女木、滝沢のおくないにも万歳楽がある」

田打ち	苗城定め	苗草取り・大足踏み	種まき	鳥追	苗取り	代播き	田植え	鳥追	万歳楽
-----	------	-----------	-----	----	-----	-----	-----	----	-----

現在の演目の一覧ですが、演目を並べてみると「息神社とおくない」は、ほぼ同じ芸能(詞章)が残っていたとわかります。

■神澤おくないは神澤六所神社で



清竜中学校の皆さん 1月4日



会場も広くなって伸び伸びと

■おくないの詞章集

懐山のおくない、寺野のひよんどり、息神社の田遊祭の詞章集に続いて三月に神澤のおくない詞章集が発行されて四冊になった。



「語りもの」は詞章が何らかの物語性をもつものであり、語られる内容表現に重点が置かれるという。
この一連の詞章集は田遊び系の神歌や田歌が収められていて祭本来の全体の流れを詠ったものである。

狂言的な言葉のやりとりから古く的生活が読み取れる。

■神澤おくない詞章集とおくないの手引き

新しい年を迎えて、豊年満作願うことから、田作業を祭りの一連の流れで祭祀の意味や農作業への思いが語られている。手引書には舞の手順など記されている

祭りの神歌に出てくるお堂やその跡が、今でも神沢の地で確認出来るのは、この地が人々の信仰を集めていて繁栄したことを物語り、それらを大切に守ってきたと思われる。

神澤のおくないが消滅して半世紀たった時に、中学校を中心に地元の伝統芸能を学ぶきっかけがあり、今では清竜中学校が「懐山のおくない」と「神澤のおくない」をそれぞれの保存会や伝承同好会の指導を受けて伝えていく。

懐山と同じように祭祀はたいへん古いもので、山奥での田楽の様子がうかがえる。失われた祭りを、この冊子は未来への伝承遺産として、世代を超えて地域で伝えていきたい。

■編集後記

浜松市無形民俗文化財保護団体連絡会が発足して五年になる。遠州の浜松にこれだけの民俗芸能が眠っていたことに驚かされる。この会も枠の中だけではなく、いまだに古くから繋がっている祭りを継承している団体を紹介していきたい。
今回、雄踏の息神社田遊祭を取材した。田遊びといえば山側を思っていたが、浜松の南側にこれだけのものが残っていることに驚いた。この南北朝の時代の面を見ると華やかだったこの祭りに思いは馳せる。